

氏 名： 頭川 典子
学位の種類： 博士（看護学）
学位授与年月日： 平成 25 年 9 月 30 日
学位記番号： 第 17 号
学位授与の要件： 学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目： 保健師がファシリテータを務める母親サポートグループ参加者の成長とそのプロセス ～子どもへの接し方に悩む母親に対する縦断的研究～
The process of growth of participants in mothers' support programs
—The longitudinal study on mothers troubled with childcare—
指導教員： 教授 安田 貴恵子
副指導教員： 教授 北山 秋雄
論文審査委員： 主査 教授 大石 ふみ子
副査 教授 内田 雅代
副査 教授 太田 克矢
副査 准教授 阿部 正子
副査 教授 北山 秋雄

論文内容の要旨

研究目的

本研究の目的は、保健師がファシリテータを務める母親サポートグループ（以下グループとする）の参加者を対象として、子どもへの接し方に悩む母親の成長とそのプロセスを明らかにすることである。本研究では子育てに悩んでいた状態から子育てに自信が持てるようになることを母親の成長と捉え、母親の考え方や気持ちの変化と子どもへの接し方の変化の二つの側面から母親がどのように成長していったのかについて検討する。またグループに参加することで母親の成長を促進している経験について検討する。以上の内容から、グループを担当する保健師の役割を考察する。

研究方法

＜調査内容と調査方法＞A 市で実施されているグループの参加者（2008 年度・2009 年度）を対象とし、経過を追って参加者個人の育児に関する経験や認識を捉えるため参加初回・終了時・終了半年後において面接調査・質問紙調査を実施するとともに、各回の感想文の記入、グループでの話し合いの録音・逐語録作成という複数の方法でデータ収集を行った。また先行研究で母親の育児不安や虐待の不安を軽減するためには母親の自尊感情が高まること、夫をはじめとする周囲からの人的サポートを受けられる人間関係の改善が重要であることが明らかとなっていることから、参加初回・終了時・終了半年後の 3 時点の質問紙調査において自尊感情尺度と家族機能尺度を測定した。データ収集はグループ開催期間中（初回～終了時）と終了半年後（7 月～9 月）に行った。

＜グループの概要＞グループの開催期間は 7 月～翌年 2 月の 8 か月間であり、月 1 回実施し合

計 8 回のプログラムで終了する。参加者は年度毎に募集を行う。

<分析方法>母親の発言や感想文等の質的データについては質的記述的分析を行い、質問紙調査の尺度を用いて測定したデータは SPSSver. 19 を用いて統計学的分析を行った。

結 果

すべての調査に協力が得られた 2008 年度 6 名、2009 年度 4 名の合計 10 名を分析対象とした。グループ参加前は【自分に自信や余裕が持てない状況で子育てをしている苦しさ】などを抱えていたが、参加中に【子どもへの接し方を変えていく努力を行う】【今までの子育てや自分の子ども時代の親子関係を振り返る】という作業を行い、【子どもに対する新しい気づき】【自分に対する新しい気づき】を得て、【子育てで大切なことを学ぶ】ことが出来ていった。そして【子育てや子どもに対しての気持ちが良い方向に変化する】ようになっていった。終了時点では【周りの助けを借りることができる】という変化が確認できた。終了半年後には【子育てや生活に対する新しい基準を獲得する】【子育てに対するゆとりや自信を持つ】【子育てへの前向きな思いを持つ】などの気持ちの変化が見られた。

自尊感情尺度と家族機能尺度について、ノンパラメトリック統計によるフリードマン検定を行ったところ各尺度の 3 時点において有意差は見られなかった。

考 察

1. 子どもへの接し方に悩んでいた母親の成長の内容

「孤立して悩みを抱え込んでいた状況から周囲に相談できるようになる」「自信のない状況から自分らしい子育てでよいと思えるようになる」「家事や子育てに完璧を求めることをやめることができ無理をしないやり方を身につける」「自信や余裕のなさから子どもへの接し方に悩んでいた状況から子育ての根本的な難しさに気づく」という考えや気持ちの変化と、「感情的な接し方から子どもに伝わる叱り方・褒め方ができるようになる」「子どもに高い要求を課していた状況から子どもの成長を見守ることができるようになる」「兄弟間で差別的に接していた状況から自分の背景にある感情に気づき差別的な態度が改善する」という子どもへの接し方の変化がみられ、これらが母親の成長であると考えられた。

2. グループ参加を通じて母親の成長を促進していた経験

グループへの参加により「子どもへの接し方に一人で悩んでいた状況から同じ悩みを持つ母親の存在を知り励みになる」「自分の日常の子育てを振り返りながら子どもとの関わり方とことん向き合う」「子育て方法や考え方をグループ内で他の母親と共有することで育児の多様性を学び視野を広げる」「子ども時代の思い出や気持ちを振り返ることで自分が目指す子育てを考える」ことが母親の成長を促進していたと考えられた。

母親の成長は育児に悩み葛藤を抱えて<子育てを変えたいという意欲>をもった時点を出発点とし、グループ参加を通じた<子育てを変えていく努力>を通じて子育てや子どもに対する考えや気持ちが良い方向に変化し、時間の経過とともに<自分だけで頑張ろうとしなくなる>ようになり、終了半年後には、子育てや生活に対する新しい基準を獲得し、子育てに対するゆとりや自信、前向きな思いを持つ、子どもへの接し方が改善するなど、<子どもへの接し方や考えや気持ちが変わる>というプロセスが確認できた。

3. 母親の成長を支援する保健師の役割

子育てに悩む母親の成長を支援するために保健師には 5 つの役割があると考えられた。「今

の状況から変わりたい」という母親の気持ちに着目し支援の場につなげる役割、母親が安心して話せる場としてグループを運営する役割、「すぐには変わらない」と落ち込む母親の状況を受け止める役割、子どもの気持ちに意識的に目を向ける支援を行う役割、母親の子ども時代の捉え直しを促す支援を行う役割である。

看護への示唆

本研究の結果より、母親サポートグループを担当する保健師の役割について、次の内容が看護への示唆として考えられる。

1. 子どもへの接し方に悩み、子育てを変えたいという意欲を持つことが母親サポートグループへの参加につながり、成長のきっかけとなっていたことから、子育ての大変な側面を語りあえる場を設けることで、悩んでいる母親を孤立させない支援が大切である。
2. 保健師は定期的な話し合いの中で母親が語る言葉に耳を傾け、その悩みを理解し、母親同士が悩みを共有したり、様々な育児方法の在り方をお互いに学びあうことができるように、一人一人の語りを引き出し母親同士の学び合いを促進するなど、安心して話せる場としてグループを運営することが求められる。
3. 母親が日常の子育てを振り返り、子どもとの関わり方に向き合うことや、母親自身の子ども時代の思い出や気持ちを振り返ることが母親の成長を促進していた経験であると考えられたことから、子どもの気持ちに意識的に目を向ける支援や母親の子ども時代の捉え直しを促す支援が求められる。
4. グループに参加した母親には、前向きな内面の変化と共に悩みや葛藤が存在していたことから、保健師は「すぐには変わらない」と落ち込む母親の状況を受け止めることで、子育ての伴走者として母親との信頼関係を築きながら、ファシリテーターとしての役割を果たすことが望まれる。

論文審査結果の要旨

1) 論文内容の要旨

「保健師がファシリテーターを務める母親サポートグループ参加者の成長とそのプロセス」と題する本論文は、子どもへの接し方に悩む母親が、サポートグループ参加を通じて悩みを解決していくプロセスを前向きに追い、母親の成長の過程とその内容、グループ参加を通じて母親の成長を促していた経験を明らかにしたものである。現代の子育て環境において、親子の愛着関係を形成する乳幼児期の子育てを支援する保健師の育児期の家族支援・虐待防止という役割は重要であり、本論文の意味するところは大きい。

研究デザインは、地方の自治体（市）で実施されている育児に悩む母親サポートグループの参加者を対象とした前向き研究であり、①参加前・8 か月間のグループ参加中・グループ終了後6 か月時点における「子どもへの接し方」、「子どもへの接し方を振り返っての気持ち」を面接調査、質問紙調査、参加観察するとともに、②参加前、事業終了時、終了後6 か月時点における自尊感情尺度と家族機能尺度のデータを収集し、成長の様相を検討した。

本論文においては、対象である10名の母親の質的データと自尊感情、家族機能得点について詳細な個別分析を行い、それぞれがどのように変化していったかが示された。

さらにそれらを統合し、母親たちには【周囲に頼らない孤立した子育て】【完璧を求める育児】などを背景とした【自分に自信や余裕が持てない状況で子育てをしている苦しさ】【子どもに冷たく接してしまうという悩み】【叱り方・褒め方などの子どもへの接し方の難しさの悩み】などに苦しむ状況があることが明らかになった。母親たちは、グループ参加を通じて【子どもへの接し方に一人で悩んでいた状況から同じ悩みを持つ母親の存在を知り励みになる】【自分の日常の子育てを振り返りながら子どもとの関わり方にとことん向き合う】【子育て方法や考え方をグループ内で他の母親と共有することで育児の多様性を学び視野を広げる】などの経験をし、その結果「子育てを変えたいという意欲」から「子育てを変えていく努力」がなされ、「自分だけで頑張ろうとしなくなる」ことをへて「子どもへの接し方や考えや気持ちが変わる」という成長のプロセスをたどっていた。成長の内容は、「感情的な接し方から子どもに伝わる叱り方・褒め方ができるようになる」「子どもに高い要求を課していた状態から子どもの成長を見守ることができるようになる」「孤立して悩みを抱え込んでいた状況から周囲に相談できるようになる」などである。

母親サポートグループを担当する保健師の役割としては、母親の成長の内容や成長を促進していた経験の内容から「今の状況から変わりたい」という母親の気持ちに着目し支援の場をつなげる、母親が安心して話せる場としてグループを運営する、「すぐには変わらない」と落ち込む母親の状況を受け止める、などが導かれた。

2) 論文審査の結果

本論文は、長期にわたる幅広いデータ収集からの貴重なデータを元にしており、保健師の母親支援という活動に生かせる成果としてまとめることが重要であった。このような視点、および博士論文としての完成度を高めるため、論文審査においては審査員から、①研究タイトル・研究目的・リサーチクエスチョン・調査内容／調査項目・研究結果における一貫性、②母親サポートグループの位置づけや具体的活動内容、③母親サポートグループにおける保健師の活動の具体的内容、について整理・追記が求められた。さらに、結果考察については、①個別分析におけるコードが元のデータ内容をより正確に表すための解釈の見直し、②研究デザインに沿った最終結果の示し方の見直し、③母親の成長についての総合的構造化が求められた。

これらの指摘を受け申請者は修正を行い、その結果本論文は一貫性を持ち、子育てに悩む母親がサポートグループでの経験を通じて自らの抱える問題に気づき、変化する具体的な有様を描くこととなり、これは育児に悩む母親への支援を行う保健師にとって貴重な資料となる成果といえる。

一方で、本論文はサポートグループに参加した母親を対象としたものであるが、母親自身の内面に焦点を当てているため、グループでの活動内容はあくまで背景として扱われて、保健師の関わりについても直接に追求は行われておらず、保健師活動の意味は補足的に考察で導き出されたにとどまる。これらは今後の課題であるといえるが、母親の体験に深く踏み込んだ考察が行われていること、また、導かれた成長のプロセスは具体性を失わず、現場の看護に生かせるものとなっていることは高く評価できると考える。

以上より本論文は博士(看護学)の学位を授与するに値する論文であると判断するものである。